

## 第 23 回 ちゅうでん教育振興助成（2023 年度）

### 小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	佐賀大学教育学部附属小学校
コ ー ス	学校支援コース
活動・研究のテーマ	社会で生きて働く資質・能力の育成

#### 〈活動・研究の意義および活動報告〉

##### 1. 活動に至るまでの経緯

我が国には少子高齢化をはじめ、エネルギー、環境など、解決すべき課題が山積している。このように解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や唯一の正答が存在しない課題について、自らの知識及び技能等を総合的に働かせて、目前の具体的な課題に粘り強く対処し解決しようとする力を「社会で生きて働く資質・能力」と定義し、これらを学校教育の中で育成することを目指し、本テーマを設定した。

##### 2. 活動・研究の目的（ねらい）

本テーマにおいて、大きく2つの視点で実践を行う。まず、各教科等において、教科の本質や系統を押さえた単元構成を意識し、深い学びを実現する授業づくりを行う。佐賀大学教育学部附属小学校（以下本校）では、本校で目指す深い学びを「実社会的な場面の中で、『見方・考え方』を働かせながら考えの積み重ねを習得・活用して思考する過程を自らくり返す学び」と定義した。各教科等で「見方・考え方」を働かせながら思考・判断・表現し、自分の考えを再構築したり、各教科等の本質に触れて面白みを味わったりできる経験を積み重ねていき、「見方・考え方」を状況に応じて駆使できるようにしていく。

さらに、各教科等で身に付けた資質・能力を教科横断的に発揮する場として、「鯨っ子学習」を位置付ける。「鯨っ子学習」とは、小学校における総合的な学習の時間の一活動であり、各教科等で育成された資質・能力や「見方・考え方」を、より現実社会に近い課題と結び付けることで、洗練、統合されたものへと高めることをねらった探究的な活動である。探究的な学びの場において、各教科等で育んだ資質・能力を生かしたり、「見方・考え方」を働かせたりすることをねらう。

これらの視点に基づいた実践を行うことにより「見方・考え方」が様々な学習場面で働き鍛えられ、社会で生きて働く資質・能力が育成されると考える。

##### 3. 活動内容

本研究では、捉えにくい深い学びを「深い学びが起きている児童の姿」や「深い学びにつながる児童の姿」として捉え直すことから始めた。児童の姿で捉え直すことで、深い学びを実現するための手立てや評価に生かせるようになることを考えたからである。また、深い学びの核となる「見方・考え方」を、各教科等だけでなく、探究的な学びの場において働かせる手立てを取り入れることにより、深い学びの実現を目指した。さらに、研究内容を冊子にまとめ、県下の全公立小学校に配布し、成果を地域に還元できるようにした。詳細は以下の（ア）～（エ）の通りである。

##### （ア）児童の姿による深い学びの捉え直し

「深い学びにつながる児童の姿」、あるいは「深い学びが起きている児童の姿」を以下の表1のように明確化した。深い学びを実現することで、どのような児童の姿が見られるのかということを確認にすることで、より意図的に深い学びに導く手立てにつなげたり、深い学びが実現できているかどうかを見取る指標とした。

表1 「深い学び」が起きている児童の姿や「深い学び」につながる児童の姿

【「深い学び」につながる児童の姿】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習活動に見通しをもち、計画を立てたり調整したりしながら、粘り強く取り組み続けている。学習課題に対して関心をもち、主体的に課題解決を図ろうとしている。</li> <li>・他教科等の学びの経験を結び付け、意欲を高めたり、解決の道筋を広げたりしている。</li> </ul>
【「深い学び」が起きている児童の姿】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「見方・考え方」を働かせながら思考・判断・表現し、自分の考えを再構築している。</li> <li>・知識が概念化し、知識の質が高まっている。</li> <li>・学びの成果を次の学習や生き方に生かす目的意識や達成感を得ている。</li> </ul>

(イ)各教科等において深い学びを実現するための手立て

深い学びを実現するために、児童が有している膨大な知識（素朴概念等も含む）を生かし、各教科等の「見方・考え方」を働かせながら思考・判断・表現し、自分の考えを再構築したり、各教科等の本質に触れて面白味を味わったりできるような授業づくりを行った。そのために以下の2つの視点を取り入れた。

- ・学びの成果を様々な課題解決に生かすことができるようにするために具体的な文脈や状況を含んだ学習を仕組む。学習対象の表面的な面白さではなく、自分の無知が自覚させられたり、自分事になれるものであったりと、児童が価値を見いだせる方策が必要となる。豊かな学びの文脈や状況の中で「見方・考え方」を働かせながら、学習対象を捉え直すことができるようにした。
- ・深い学びを実現させるために、「見方・考え方」を働かせるための手立てを追究した。授業においては、課題解決に効果的な「見方・考え方」を教師自身が明確にもち、児童が主体的・対話的な学習活動の中で気付けるような手立てを打てるようにした。そのために各教科等特有の「見方・考え方」を整理した上で、「見方・考え方」を働かせるような状況をつくり出したり、問いを生み出したりする等、授業実践を通して効果的な手立てを明らかにした。

(ウ)教科等横断的に資質・能力を育む探究的な活動

探究的な学びにおける「学習過程モデル」として、一人一人が研究テーマをもち、仮説を立てて追究する学習過程を開発した。この学習過程を基にした総合的な学習の時間として「鯨っ子学習」を設定した。「鯨っ子学習」は年1回、15時間程度行う個人探究活動である。そこでは、日常生活や各教科等で学んだことから生まれた課題意識を基に、探究的な学びのサイクルの中で、課題解決に迫った。この「鯨っ子学習」を軸として1年間のカリキュラム・デザインを見直し、各教科等で身に付けた資質・能力や「見方・考え方」を自覚できるようにした。

「鯨っ子学習」では、児童が「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という探究的な学びを実現するための学習過程モデルを作成した。その学習過程モデルは教師用、児童用と分けて「鯨っ子学習のすゝめ」として整理し、児童が見通しをもって活動できるようにした(図1)。課題の設定においては、専用のノートに日常生活や各教科等で学んだことや関心を抱いたものを記録(「課題ストック」)し、探究的な学びに耐え得る課題を設定できるようにした。また、各学年における教科等の学びと「鯨っ子学習」で培われる資質・能力のつながりを明確にするために、ラーニングマップを活用した(図2)。ラーニングマップとは、各学年の教科等の指導計画を基に、各教科等におけるどのような資質・能力が活用できるのかを示したものである。ラーニングマップを用いたことで、総合的な学習の時間における「資質・能力デザイン」に沿った力を身に付けることができた。

(エ)研究成果の還元

本校は、佐賀県の学力向上推進地域指定事業の研究協力校となっている。本研究における実践や有効性を冊子にまとめ、県下の全公立小学校に配布することで、その成果を本校だけでなく、地域の児童へ還元できるようにした。また、各教科等でまとめた実践資料も配布した。

4. 子どもたちへの効果(成果・課題)

各教科等が目指す「深い学び」に応じて、児童が働かせる「見方・考え方」を小中間で共有し、実践に生かすことができた。その結果、小学校では、児童が意識して「見方・考え方」を働かせる場面が見られるようになった。また、「鯨っ子学習」を設定したことで、各教科等で育成された資質・能力や「見方・考え方」を、より現実社会に近い課題と結び付けて発揮する経験を積むことができた。さらに、義務教育9か年で指導すべき資質・能力を整理した「資質・能力デザイン」や、それぞれの学習過程において、各教科等の学びが、どう生かせるかをまとめた「ラーニングマップ」を用いることで、児童自身が、どのような資質・能力を身に付けるのかを明確に捉え、自覚することができるようになるだけでなく、教師が系統性や見通しをもって指導や支援を行うことにもつながった。

習得・活用・探究という学びの過程は、学びに対する切実感や必要感を大切に、児童の課題意識を喚起することが重要である。今後も、児童にとっての学びの価値を大切にするとともに、それが単元を通して拡充されながら深い学びが生まれる学習過程の在り方を探っていきたいと考えている。さらに、今後は「見方・考え方」のみにとどまらず、教科等の学びを超えて汎用的に発揮される力とはどのようなものか、研究を進めていきたい。また、「資質・能力デザイン」を児童と共有し、ルーブリック評価や自己評価を活用しながら、児童が探究的な学びを通して教科等横断的に資質・能力を育成していく探究的な学びの在り方を探っていきたい。

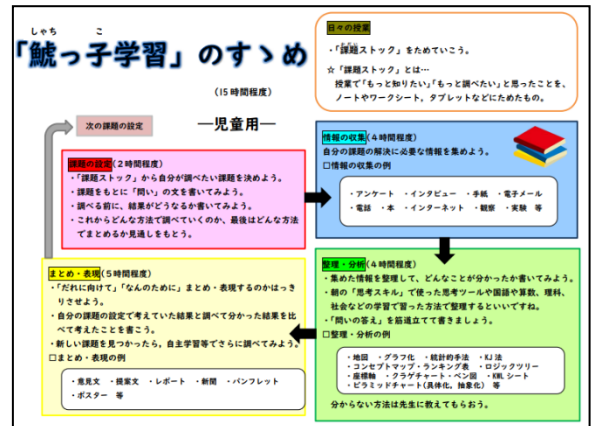


図1 鯨っ子学習のすゝめ (児童用)

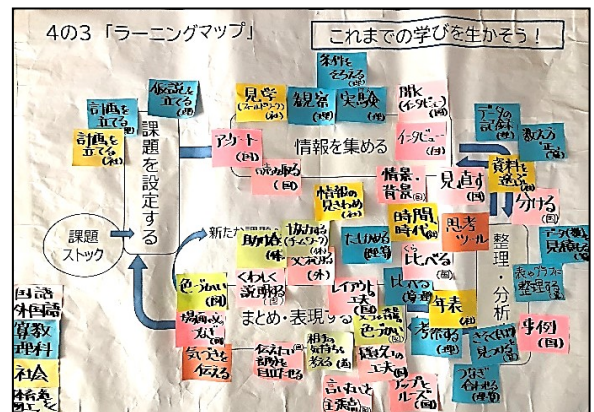


図2 児童が作成したラーニングマップ